

2026年1月18日 第二礼拝

説教題『教会を新たにする福音』使徒言行録15章1～21節

主任牧師 加藤 誠

「人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖靈を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、わたしと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした」（使徒言行録15章8～9節）

使徒言行録は、主イエスの命の言葉がパレスチナから世界に向けて「外へ、外へ」と広がっていく物語です。飼い葉桶に生まれた貧しい赤ん坊に託された命の言葉は、ローマ皇帝の名の下で十字架で握りつぶされてしまいます。しかし、その命の言葉がローマ皇帝のもとにまで持ち運ばれ、やがてローマ帝国そのものを変えていく不思議な物語、それが使徒言行録です。神の言葉は、人間の権力がどんなに握りつぶそうとしても、つぶしきれない命の言葉であり、愛の御言葉だからです。

また、この命の言葉はユダヤ教の壁を壊し、異邦人とユダヤ人との新しい関係をつくりだし、教会の体質を新しい交わりに変革していきます。キリストの言葉は私たちを新しい出会いに導き、私たちを新しい存在に造りかえる命の言葉だからです。この「外に向かう福音の矢印」をいただく私たち大井教会は、2026年をどのように歩むのか。今年も毎週、聖書に聴いていきたいのです。

さて、今朝の使徒15章は歴史上「エルサレム会議」と呼ばれている重要な会議です。この会議では「異邦人（異教徒）がクリスチャンになるためには、イエスへの信仰を言い表してバプテスマを受けるだけでなく、ユダヤ教徒としての割礼を受ける必要がある！」という理解と、「いや、異教徒が割礼を受ける必要はない。信仰告白とバプテスマだけで十分だ！」という理解が激しく衝突しました。

今の私たちは「バプテスマだけで十分」という福音が当たり前ですが、それまで約千五百年の長い間、割礼を大切に継承してきたユダヤ人（ユダヤ教徒）にしてみれば、とうてい納得できないことでした。主イエスもペテロたち十二弟子たちもみんな割礼を受けたユダヤ教徒でしたから、主イエスを信じるということはユダヤ教徒になることだというのが、当然の帰結だったのです。「イエスさまだって割礼を受けていたのだ！」。これは相当な説得力があったと思います。それに対してパウロは「人はすべて罪人であって、律法（割礼）の実行によっては誰ひとり義とされない。イエス・キリストの信仰のみでよい！」と主張しました。パウロは主イエスに出会う前は人一倍律法の実行に熱心でしたが、熱心であるほど自分を誇り、律法を実行できない人を軽蔑して、神の前に罪を深めてしまった。だから「すべての罪人を救う十字架のキリストの恵みの福音を信じるだけでよい」という確信に立っていたのです。

両者の意見は激しく衝突し、なかなか結論が出ない中で、ペトロが自らの経験を語

りだします。それは使徒 10 章のコルネリオとの出会いが下敷きになっている証しでした。ペトロは幻の中で律法が禁じる食べ物を「食べよ」と言われ、最初は「とんでもない！」と断りますが、「神が清めたものを清くないなどと言ってはならない」という声が三度繰り返される中で、ペトロは「これは神の導きに違いない」という確信を与えられコルネリオの家を訪ねます。そして異邦人のコルネリオたちの真剣な信仰に触れたときに「キリストはすべての人の主であり、この方を信じる者はだれでも罪の赦しを受ける」と確信し、聖霊が降った彼らにバプテスマを勧めたのでした。この経験を踏まえてペトロも「異邦人には割礼は必要ない。キリストを信じる信仰のみでよい。救いの前に分け隔てはない」と語ったのです。

そのペトロの証しに人々は静かになり、最後に主イエスの兄弟ヤコブが結論をまとめます。「異邦人には割礼を求める。ただしユダヤ人と異邦人が一緒に教会を形づくるために、ユダヤ人が大切にしているケガレについての戒めを異邦人は尊重するように」と。このエルサレム会議を境に、教会の福音理解は大きく変えられ、教会の交わりの質も大きく変えられていきます。それまではユダヤ教の影響で「女性よりも男性が、異邦人よりもユダヤ人が教会の中で権威を持つ」のが当たり前でしたが、「キリストにあっては、ユダヤ人もギリシャ人も、自由人も奴隸も、男も女もない！」（ガラテヤ 3・28）というパウロの福音理解に立つ教会が生まれていったのでした。

『現代聖書注解 使徒言行録』の著者ウィリモンは、エルサレム会議は私たちに大切なことを教えていると語ります。教会内で論争を避けたり、意見の相違を覆い隠すのではなく、主イエスの福音を信頼して、論争や意見の相違と正しく向かい合う力を求めていく、つまり聖霊の導きを祈ること。安易に多数決で決めてしまうのではなく、お互いの経験（証し）を聴き合い、そこにどのような幻（聖霊）の啓示が示されているのかを聴き合う。さらに、聖書を開いて「聖書は何といっているか」を確認し合う。そのようなプロセスが、教会をキリストの教会にしていく。新しい人々に命の御言葉を届けると同時に、その出会いを通して、「人間の思いをはるかに超える聖霊の働き」に目を開かれ、自分たちも新しく変えられ続けていく教会にされていくのだと。ポイントは聖霊の働きにみなが敬意を示し場所を開けていくことでしょう。先日天に召された T さんは二年前のペンテコステで次のような証しをされました。「私は椅子に座るとき、後ろを少し空けておきます。聖霊が座るために。ですから、キリスト教会も国会も、国際ナンチャラ会議も、出席する方々は、ちょっと聖霊の席を空けていただけたらな、と思っています。この世を愛して創られた神さまに。この世をうまく運営するには、人間の力と知恵だけではダメです。聖霊の力が必要だと思います。これが、ナーンチャッテ、ポリティシャン、クリスチャン、道べえのペンテコステです。」私たちも聖霊が座るための座席をちゃんと空けて主イエスの教会とされていきましょう。